

武庫川女子大学
武庫川女子大学短期大学部

第17号

FDニュース

100th
創立80周年
武庫川学院

● 目 次 ●

- 〔1〕 FD 推進委員会12年目に
平成30年度 FD 推進委員会検討事項
- 〔2〕 平成30年度 FD 研修会開催報告
Café FD 「発声方法」に関する勉強会
- 〔3〕 学生の主体的な学びを引き出すために
—ブレインストーミング& KJ法を活用して—
平成30年度 教育改革講演会
「3つのポリシーと学修成果の可視化について」
- 〔4〕 共通教育懇談会を共催で実施しました
大学院 FD 実施報告
「第3期認証評価における内部質保証システムの構築
—大学院教育の観点から—」
SD 推進委員会が活動中です
編集後記

FD 推進委員会12年目に

FD 推進委員長 保井 俊英



2008（平成20）年1月1日に、FD 推進委員会は発足し、本年1月で12年目に入りました。初代委員長の前原健三先生から、高橋享子先生、渡邊完児先生、北村薫子先生、三宅弘晃先生のリーダーシップのもと、FD 推進委員会は着実に発展を遂げてきております。その間の具体的な活動につきましては、FD 推進委員会のホームページに掲載させていただいておりますので、またご覧いただきたいと存じます。

私は、委員着任当時より、研修会などの「大きいFD」だけでなく、立ち話など身近で行われている「小さいFD」に目を向けるべきだという持論がありました。私自身は決して教育学の専門家ではなく、単なる一教員であり、さらに最もFD活動に遠い教員であったと自負しております。そのような私をどうしたらFD活動に参加させることができるか、またFD用語の1つも覚えきれない、使えないそんな私をどうしたらこのFD活動の世界に導き入れることができるのか、これが発想の根底にあります。FD活動は、身近なところで必ず展開しています。それを拾い集めたい、これが委員長としての課題です。

今年度は、初めてカフェFDを実施させていただきました。これは、FD活動というより、教職員のコミュニケーションの場をイメージさせていただいております。発想の原点は、入試の学外試験場です。教員、職員関係なく、皆様が大学のことを思って発言されているシーンです。そこでつくられたコミュニケーションは、結構大事にされているのではないのでしょうか。

ところで、「どんな学生をつくるのか」それは、3つのポリシーを見ればわかります。しかし、見た目は、やはりカリキュラムだと思います。そして、就職先（進学先も含む）が、その結果を表すことになると考えます。カリキュラムを実行しているのは、それぞれの授業であり、学生との関わりが一番多いのも授業です。この授業を、いかにしっかりと行うことができるかが、教員の資質、しいては大学の質として現在問われています。

2022年には、本学に対する認証評価が行われます。そのための資料作成時に気づくのでは遅く、毎年のPDCAサイクル、特にC（Check）からA（Act）に結びつけていただきたいと願っております。

FD 推進委員会としては、これらの部分の橋渡しの存在をめぐし、今後も発展し続けたいと考えます。皆様方のご協力をお願い申し上げます。

平成30年度 FD 推進委員会検討事項

ワーキンググループ	目的	活動内容
1 FD 研修・勉強会等の企画と開催	授業改善の取組みや、能動的学修に関する事例の紹介及び勉強会やこれからの大学教育に求められる教育の内部質保証システムの構築に関する研修会等を中心に企画、実施する。	・教育改革講演会の企画・実施（年1回） ・カフェFDを含む学内研修会の企画・実施（年3回） ・学内委員会・部局・部署とのジョイントFD（年4回）
2 実効性のある授業公開の実施	授業改善活動の一環として例年、前期・後期に一定の公開期間を設定して全ての授業を公開している。教員相互の授業参観を通じて教育方法や教材等の工夫についての情報交換を行い、授業改善の活性化を測る。	・授業公開の企画・実施（年2回） ・授業公開の改善案の検討
3 授業アンケートの促進と全学的FDへの活用	授業担当者の授業改善を目的として、前期・後期の授業に対する学生アンケートを実施する。（実施の主担当は教務課）	・授業アンケート内容の検討 ・回収率アップ方策の検討
4 学科FDの実情調査	各学科におけるFDの実施状況を把握し、その情報を学科間で共有・相互連携することで各学科の取組みの活性化を図り、大学全体としての教育力向上につなげていく。	・各学科へ学科FDの実情調査（予備調査） ・次年度へ向けて本調査内容の検討

平成30年度 FD 研修会開催報告

Café FD



FD推進委員会では、大学全体の“大きなFD”と共に、身近で気軽に参加できる“コンパクトなFD”の開催を目指してきました。コンパクトなFDの開催にあたり、どのような形態が良いのかを議論した結果、気楽におしゃべりができる「カフェ形式」に辿り着きました。そこで、参加しやすいように入退室は自由にし、FD研修にありがちな「班ごとにまとめる」や「発表」や「リーダーを決める」などは行わず、カフェでお茶を飲むイメージを大切にして準備を進めました。

いつ開催するかも迷いましたが、今回は、前期終了後（7月24日）と後期終了後（1月22日）の授業等調整日に開催することとなりました。その結果、第1回は49名（12学科32名の教員と11部署17名の職員）、第2回は27名（8学科15名の教員と9部署12名の職員）と、多くの方に参加いただきました。このように様々な所属の方に集まって頂いたおかげで、普段はなかなか会う機会がない教職員が、授業や業務や学生について感じている内容を率直に話し合える場となったと思います。

参加者の方には、議論をまとめる作業をお願いしなかったため、各テーブルで話された内容の詳細は分かりません。しかし、アンケート（無記名・任意提出）からは、話題になったテーマは、「講演会の謝金」「スマホの扱い」「SNSのこわさを学生に伝える重要性」「学生の主体性のなさ（何でも教えてほしいという）」「学生のPC操作能力」「学生と教員の健康管理」など幅広いものであったことが分かりました。また、カフェの良かった点は、「他学科の状態が分かりあえたこと」「他部署との情報交換」「問題意識の共有」などの所属を超えた情報共有ができたことが多くあげられていました。一方、次回へのアイデアについては、ファシリテーターや資料があってもよいかもしいというご意見を頂きました。今後も、気軽に参加できるFDの開催を続けていきますので、お時間があればぜひお越しください。



「発声方法」に関する勉強会



音楽学部FD推進委員である大森地塩先生によるワークショップを開催しました。10月2回、11月2回、12月2回と計6回、場所は音楽館2階のレッスン室で行われ、参加者数はのべ23名でした。

大森先生から授業で声に悩みを抱えている先生方に鼻腔の共鳴、顎の動き、舌の位置について説明していただき、発声トレーニングを行いました。普段と異なる声の出し方ですので始めは緊張しましたが、出し続けていると思った以上に声が出せていることを感じました。発声するうちに少しずつ音程が上がっていくので、高い声を出せるか自信がなかったのですが、そんな時は必ず大森先生が言葉がけしてくださり、心の緊張を解きほぐしてくださるので気持ちよく声を出すことができました。発声の合間には声を出す際のポイントや顔の位

置について説明もありました。楽しく感じ始めたところで1回のワークショップは終了です。1時間発声していたにも関わらず、終わった後は始める前に比べしゃべり声ですらだしやすく、体も軽くなりすっきりした気分になりました。発声ひとつで体の負担を軽減することができるとその分授業に集中できると思いますので、声に悩みをお持ちの先生にとっては授業を進めていくうえでかなり大きな改善に繋がると感じるワークショップでした。

大森先生と受講者で和やかな雰囲気でお話しする時間もあり、皆で発声のポイントを掴めた楽しいひと時でした。

FD企業「授業での発声講座」のご案内

FD企業「授業での発声講座」のご案内

10/10(水)まで
教育開発支援室へご連絡ください
(申し込みは申し込み用紙を提出)

お問い合わせ先
教育開発支援室 (田中・堀橋・田中・志本)

学生の主体的な学びを引き出すために—ブレインストーミング & KJ法を活用して—



学生の主体的な学びを引き出すための実践事例の紹介と事例を体験してもらう研修会を2月26日（火）に実施しました。

今回研修会の講師をご担当いただいたのは、生活環境学部食物栄養学科の横路三有紀先生です。先生は、本学から毎年一人の先生が参加されている全国大学実務教育協会主催の「能動的学修の教員研修リーダー講座」に参加されました。構成としては、前半部分で、その講座で学んだ内容の報告と、学んだ内容を実際の授業でどのように活用されているのか、またアクティブ・ラーニングの手法を授業に取り入れた際の成果と課題点についてご講演いただきました。後半部分では、「能動的学修とは」というテーマを設定し、講演の中で学生の考えを引き出すための手法として紹介いただいた、「ブレインストーミング」と「KJ法」を学生目線で体験しながら、参加者同士での意見交換を促したグループワークを行いました。



研修会終了後にアンケートを実施したところ、「アクティブ・ラーニングの意義や実際の授業での活用法などを知る事ができた。」「資料としてグラフ等のデータを提示する際、まずは学生自身にデータから読み取れることを考えさせるという事例は、良い取り組みだと思った。」「実際に学生側の体験をしてみて、学べたことが多かった。」というコメントをいただきました。今後も一人でも多くの方に「参加してみたい」「参加して良かった」と思ってもらえるような企画を検討していきます。



研修会終了後にアンケートを実施したところ、「アクティブ・ラーニングの意義や実際の授業での活用法などを知る事ができた。」「資料としてグラフ等のデータを提示する際、まずは学生自身にデータから読み取れることを考えさせるという事例は、良い取り組みだと思った。」「実際に学生側の体験をしてみて、学べたことが多かった。」というコメントをいただきました。

今後も一人でも多くの方に「参加してみたい」「参加して良かった」と思ってもらえるような企画を検討していきます。

※「能動的学習の教員研修リーダー講座」への参加者募集について

毎年、一般財団法人全国大学実務教育協会主催「能動的学習（アクティブラーニング）の教員研修リーダー講座」への参加者を1名募集しています。学生の理解を高めるためにアクティブラーニングを効果的に活用したいとお考えで、研修講座に関心をお持ちの方は4月17日（水）までに教育開発支援室へお申込みください。詳細はinfo@MUSESで案内しています。（対象は本学の専任・嘱託教員となります。）

平成30年度 教育改革講演会「3つのポリシーと学修成果の可視化について」

大学教育は今、「何を教えたのか」から学生が「何を学び、何を身に付けることが出来たのか」という主体的な学びへの転換と、それを可視化して継続的な改善を図っていく「教育の内部質保証システム」を構築することが求められています。これらの状況を受け、平成30年12月5日（水）に大阪府立大学高等教育開発センター畑野快准教授をお招きして、学修成果の可視化の全体像を学ぶための講演会を開催しました。



講演ではまず、FDの体制化から、今年度より第3期に入った認証評価制度へ至るまでの国の高等教育政策の流れについて、中教審の答申等をもとに説明されました。国内外の社会構造が大きく変化していく中で、大学教育に求められる役割がどのように変わり、何故、学修成果の可視化が重要とされるのか、その背景を理解することが出来ました。

講演の後半では、大阪府立大学の事例を紹介していただきました。学修成果を可視化するための仕組みである内部質保証システムとして、学内の組織体制やマクロ（機関）・ミドル（学位プログラム）レベル・マイクロ（授業）レベルの具体的な取組みについて説明いただきました。同大学では、蓄積されたGPAや学生調査のデータを用いて継続的にカリキュラム改善を図ると共に、eポートフォリオを介して学生と教員がそれぞれ自分の学びと授業を振り返り、その後の取り組みに活かしていく仕組みが構築されています。また、PDCAサイクルを回しながら、内部質保証システムそのものの改善も図られていることもよくわかりました。

本学では、教育改善のための様々な取り組みが行われていますが、大学教育全体の質保証という観点で捉えた際に、それぞれがどういう役割を果たし、関連し合うかというところには至っていません。3つのポリシーに基づく内部質保証システムの構築は第3期認証評価の重点評価項目とされており、学内の議論も本格化していくとされます。参加された先生が熱心にメモを取られる様子からも、その重要性を感じました。



■ 共通教育懇談会を共催で実施しました

平成30年7月30日(月)と平成31年2月18日(月)に実施された共通教育懇談会について、初めてFD推進委員会と共催の形で実施しました。7月開催分については「気になる学生」、2月開催分は「成績評価」をテーマに意見交換を行いました。特に「気になる学生」に関しては授業への参加態度、ケガや疾病に由来すること、LGBTの問題などについて活発な意見が出ました。従来より行われている共通教育懇談会もまさに授業を改善する目的で行われているFDとしての取組であり、今後FD推進委員会としてはこういった学内におけるFDに関する取組とも連携していきたいと考えています。



■ 大学院 FD 実施報告

「第3期認証評価における内部質保証システムの構築—大学院教育の観点から—」

11月28日(水)に公益財団法人大学基準協会評価研究部 企画・調査研究課係長松坂顕範様をお迎えし、大学院FDを開催しました。

当日は瀬口学長を含め、約40名の教職員が参加し、大学評価の基本事項の再確認及び大学基準協会が考える内部質保証の在り方について学びました。前回受審した第2期認証評価基準から今回第3期は大きな変更点が示されており、特に「内部質保証機能の有効性と全学的観点からの評価」、「学修成果の重視」が大きく取り上げられています。松坂様からは大学院に関しても大学と同様に学修成果に照らして教育の有効性を検証・評価する必要があることについて言及があり、大学評価にあたっては「大学基準」や「点検評価項目」だけでなく、「基礎要件に係る評価の指針」、「判定及び判定保留の基準とその運用指針」についても目を通しておくようにとの助言がありました。

本学が次回認証評価を受審するのは2022年となりますが、認証評価を受審するためではなく、日頃より本学の教育が学生に対して有効であるかを検証・評価することが大切です。地域社会に応え続けられる大学であるためにも、本日の講演を参考に学内の組織整備を進めていければと思います。



■ SD 推進委員会が活動中です

SD 推進委員長 内藤 裕美

SD推進委員会が2015年7月に発足してから4年目。現在、第2期10人のメンバーで月1回の会議と、講演会や情報交換会を企画・実施しています。SDに関わっている職員だけでなく「自発的にSDを行う」前向きな職員が増える風土作りをしたいと考えています。

改めて原点に戻るとSD(Staff Development)とは…“大学職員の能力を高めていくための取組み”で、大学設置基準等の改正後の法令には、“「職員」には、事務職員のほか、教授等の教員や学長等の大学執行部、技術職員等も含まれること”とあります。

現在のSD推進委員会は事務職員だけで構成されていますが、FD推進委員長の保井先生を通じ、情報交換の機会や講演会等の企画への参加など、連携をさせていただく機会が増えました。日頃、FD推進委員長が仰っている“武庫女を良くする”ための「教職協働」を目標とし、今後もFD推進委員会との連携を強めていきたいと考えています。



編集後記

今年度を振り返ると、カフェFD(前期・後期)、教育改革講演会、授業での発声講座、能動的学修の教員研修リーダー講座による成果報告会と、数多くの行事に開催側として携わらせていただきました。また、ディスカッションに参加させていただく機会があったのですが、とても発言しやすく和やかな雰囲気の中で実はとても濃い内容であり、充実した時間を過ごすことができました。普段の業務の中でなかなかこのような会に参加する時間を作ることができなかつたりすることが多々ありますが、参加することで自分を客観視できる場面を感じたり、今後の業務に取り組む自分なりの姿勢が変化するように感じた一年間でした。

(編集委員 NS)

